

「K」の閃光

第93回 日本陸上競技選手権大会

第12回世界陸上競技選手権大会代表選手選考競技会において、春高陸上部史に残る、輝かしい記録が生まれた。

大塚さんと後藤は、直前までコンディショニングを整えていた。

好調だった。

「ゴールデン・エイジ」と呼ばれる世代

2006年の高校3年生。

高橋 萌木子選手を筆頭に、何かと話題の尽きない年代だった。

インターハイ100m3連勝、高校記録。そして200mで彼女を抑えてジュニア新記録まで達成した中村宝子選手、精鋭揃いの北海道のスター 福島千里選手。

いまや完全に世代交代を成し遂げた感の女子短距離。

10年前までは日本女性が11秒3で走るなど、考えもつかなかった。それがいまや世界標準記録を100m、200m、400mで上回っている。

技術解析、日本中の選手、指導者のみなさまの努力の結晶だ。

そして同期男子短距離の面々。

インターハイを制した後藤。国体で勝った江里口選手。100mから400mまでトップクラスでこなせるマルチなスプリンター我孫子選手。高校時代すでに日本選手権で入賞しており、後藤と僅差でインターハイ優勝を争った荒尾選手・・・これらのスプリンターは、塚原選手に肉薄し、日本400mRの魂を担う若手にまで成長した。

この学年こそが、陸上界で「ゴールデン・エイジ」と呼ばれる世代なのだ。

2003年 塚原選手が北海道インターハイで優勝した年、後藤も全中北海道大会で勝った。

近い将来、凌ぎあう二人は偶然にも同じ場所で全国を制した。

広島の高速レーン

ここ、広島では高速サーフェイストラックと、追い風が吹き続ける「短距離トラック」。

半ドームの大阪や横浜のようなタイプではなく、ホームストレートのみが強めの追い風が吹くタイプ。よって幅跳び、100mと200m以外のトラック種目には恩恵は少ないようだ。

梅雨前線も、選手達の信念に押しやられるかのように快晴が続いた。まるで真夏の太陽光線。鮮烈な日差しだ。

北京の400mRの余韻を残して、世界陸上選考会は短距離がヒートアップしたのは必定。男子は塚原、高平以外のメンバーは誰が勝ち取るのか？女子は史上空前の世界標準の戦い。400mRとて42秒台を狙えば決勝も夢ではない。

やはり追い風に恵まれ、好記録が続出すると、俄然選手達も昂揚する。これは世界大会も県大会も同じだろう。興奮してアドレナリンが沸きあがり、更なる記録も生まれる。

男子100m予選

正直、10秒3台でないと予選すら通過しないだろう・・・と私は考えた。それくらい日本の短距離は層が厚い。北京の400mRはスターがいたから五輪3位に入っただけではない。10秒1～10秒2の選手がきちんと揃っていて、「奥義」ともいえるバトンテクニックをみがいた末の結果。

したがって予選は10秒3、準決勝は10秒3前半、決勝は10秒2台で6位・・・風が変わらなければ、それくらいハイレベルな戦いになると予想された。

前日までの200mでは、やはり好記録の連発。

高平選手は20秒22という世界のセミファイナルクラスをマーク。20秒7でもやっと6位という国内史上最高の200mとなった。

女子はもちろん「ミス日本新記録」の福島・高橋対決。

ゴール通過で22秒台が表示され、正式には23秒00の大記録！

・・・ついに日本女性が22秒台へ突入しようかという時代がきた。

100m予選が始まった。

予選3組 後藤は、ダッシュ鋭く飛び出した。

早稲田の木村選手、福岡大の荒尾、そして3位に後藤が着けた。

10秒37の自己記録が生まれた！！そして予選通過。

最も難しい予選を自己記録で乗り越えた後藤は、ついにセミファイナルという大きなチャンスをつかんだ。そして10秒3台という100mスプリンターとして、憧れの領域に入り込んだ。

予選を終えて10秒50までがセミファイナルへ。

塚原選手は10秒09、江里口選手は10秒14とそれに続く。

ファイナリストへ

20年前なら10秒4～5で勝つこともあった日本選手権。

だが昨今の日本短距離陣の充実により、セカンドグループがヒートアップ。

極めて難しいファイナルへの道になってしまった。

準決勝1組は江里口選手が好調！

10秒07という日本歴代4位の記録をマーク。

末続選手の日本学生記録10秒03をもう少しでとらえそうな勢いだ。

2位には荒尾選手、3位に木村選手が10秒2台で続く。

4位のシドニー五輪代表の小島選手も10秒26で通過！

速い！俄然、緊張感が強まる。

2組は塚原選手がいる。案の定、スタートしてグングン加速し、2位集団を引き離す。よって、やや固くなったか2位集団。

しかし、後藤はこの重要な場面で2位をしっかりとキープ。

見事に10秒32というスピードで駆け抜けた！

やはり勝負強い・・・！風は2.4mと発表されたが、一瞬のことだろう。記録と順位は順当。

今大会は1組の10秒35でも決勝に進めないという極めてハイレベルなレースになった。準決勝落選としては、おそらく国内史上最高記録だろう。



男子

100m

予選	6月27日	16:25
準決勝	6月28日	16:00
決勝	6月28日	17:50

世界記録(WR)
日本記録(NR)
大会記録(NCR)

9.69 U. ボルト
10.00 伊東 浩司
10.05 朝原 宣治

ジャマイカ 2008/8/16
富士通 1998/12/13
大阪ガス 2002

準決勝

通過基準 2組 4着 + 0

0:順位順通過者 q:タイム順通過者

[1組] 風速 +1.9

順	レーン	No.	氏名	所属名	記録/備考
1	3	94	江里口 匡史 エリグチ マサシ	熊本 早稲田大	10.07 Q
2	5	122	荒尾 祥吾 アラオ ショウゴ	福岡 福岡大	10.22 Q
3	4	93	木村 慎太郎 キムラ シンタロウ	奈良 早稲田大	10.22 Q
4	6	95	小島 茂之 コジマ シゲユキ	兵庫 アシックス	10.26 Q
5	2	115	川面 聡大 カワラ サトシ	東京 中央大	10.35
6	7	99	小谷 優介 コタニ ユウスケ	滋賀 立命館大	10.40
7	1	125	内海 祐弥 ウチノミ ユウヤ	山口 東洋大	10.48
8	8	98	日高 一慶 ヒタカ ヒサキ	宮崎 宮崎アスリート	10.53

[2組] 風速 +2.4

順	レーン	No.	氏名	所属名	記録/備考
1	3	90	塚原 直貴 ツカハラ ナオキ	神奈川 富士通	10.09 Q
2	1	102	後藤 乃毅 ゴトウ ノリキ	埼玉 慶應義塾大	10.32 Q
3	5	111	長沢 隼 ナガサキ シュン	北海道 タイセイ	10.34 Q
4	8	103	河合 元紀 カワイ ゲンキ	大阪 中央大	10.40 Q
5	7	112	佐久間 康太 サクマ コウタ	宮城 あぶくまAC	10.40
6	6	110	岩元 一章 イワモト カズキ	長崎 長崎AC	10.40
7	4	100	仁井 有介 ニイ ユウスケ	北海道 北海道ハイテクAC	10.46
8	2	105	加藤 広大 カトウ ヒロキ	愛知 中京大	10.56

スピードとリスク 諸刃の剣

男女とも決勝レースには優勝候補筆頭が欠場した。

男子は日本歴代4位、5位対決であり、女子は1位2位対決であったが、この夢のカードは実現しなかった。

「高速トラック、好記録の代償」・・・脚に違和感を生じたためである。

未経験のスピードは、同時に未経験の負荷もついてくる。

福島選手のコーチは、「無理して決勝を走れば取り返しのつかないことになる」と発表。つまりは肉離れの危険が強かったのであろう。標準記録は突破しているので当然の策だ。

それでも高橋選手の集中力は切れることなく、女子決勝は11秒35という自己歴代2番目の記録で優勝を飾った。もはやこの二人にとって11秒3台は至極当然・・・という感すらある。

さあ、男子100m決勝だ。

一気に10秒2の世界へ

塚原選手のレーンが空いていて、後藤は4レーン。

5レーンに荒尾選手。2006年大阪インターハイを思い出す。



スタート。

後藤のスタートもいい。

20mで江里口、木村、荒尾、後藤の4人が抜けてきた。

さらに中盤から江里口選手が抜け出し、グングン差を広げる。

2位集団は後藤、荒尾、木村の3人。





2位争いからは木村選手が最後抜け出した。
僅差で荒尾選手、後藤が続いた。

早稲田勢が1, 2位を決め、後藤は4位に食い込んだ。



男子

100m

世界記録(NR)
日本記録(NR)
大会記録(NCR)

9.69 U. ポルト
10.00 伊東 浩司
10.05 朝原 宣治

ジャマイカ
富士通
大阪ガス

2008/8/16
1998/12/13
2002

予選	6月27日	16:25
準決勝	6月28日	16:00
決勝	6月28日	17:50

決勝

風速 +1.9

順	レーン	No.	氏名	所属名	記録/備考
1	6	94	江里口 匡史 エリグチ マサシ	熊本 早稲田大	10.14
2	8	93	木村 慎太郎 キムラ シンタロウ	奈良 早稲田大	10.22
3	5	122	荒尾 将吾 アラオ ショウゴ	福岡 福岡大	10.23
4	4	102	後藤 乃毅 ゴトウ ノリタケ	埼玉 慶應義塾大	10.28
5	2	103	河合 元紀 カワイ ゲンキ	大阪 中央大	10.39
6	7	111	長沢 隼 ナガサキ シュン	北海道 タイセイ	10.40
7	1	95	小島 茂之 コジマ シゲユキ	兵庫 アシックス	10.44
		3	塚原 直貴 ツカハラ ナオキ	神奈川 富士通	棄権

代表には2位までの選手が追加された。

現段階では後藤は惜しくも枠に入れなかったが、「史上最強」と称される現在の日本短距離陣の候補であることには間違いない。

ゴールデン・エイジの未来

同期の結果は？

女子は福島・高橋が実力通り代表へ。男子は江里口選手が初代表となった。しかし100mでは荒尾選手が3位、後藤が4位、200mでは我孫子選手が4位で、しかもみなB標準を越えている。十数年前なら即、代表だろうがこの層の厚さでは仕方ない。

解説の緒方先生(筑波)は言っていた。「いやあ・・・すごいレベルですね。上位5人が大学生ですよ・・・10秒39でも5位ですか・・・」

別番組で朝原さんが「私が引退してリレーも不安だったが、ふたを開けてみたらうれしい若手の大活躍ですよ。」と、談笑していた。

今後もこの世代の活躍が見逃せない。

間違いなくロンドン五輪の陸上界を担うことになるだろう。

大塚 後藤ライン

この日本選手権の前に大塚さんから連絡があった。

「今回は後藤の調子いいよ。記録でるよ」

やはりある域まで完成した選手は、個々の癖を熟知したコーチが必要なのだと思う。

なぜならプロ野球やプロゴルフの選手たちを見て思う。

我々からしたら超人的な体力を持つはずの彼らが、調子を崩した場合、原因は何か？もちろん練習不足や不摂生ではない。一般人には解からない領域での「タイミングのずれ」「微細な軸の動き」なのだと思う。

タイガーウッズもミスショットは必ずあるのだ。

甲子園のスター投手も、下手なプロコーチがいじくって全くダメにしてしまう事もあるのではないだろうか。陸上でも中学時代すごい記録を持つ選手が、高校で指導者が変わり、見る影も無く衰退する事例は少なくはないだろう。それは選手と監督のどちらに問題があるかは判別のしようがないが、後藤の場合、10秒8から10秒2にまで向上してきた事が、相性のよさを証明している。

そういった意味では、後藤の15歳からを知る大塚さんのアドバイスが重要なのではないだろうか。このコーチング関係を、後藤もうまく距離感を保ち続けていけばいいと思う。

第12回世界陸上競技選手権大会日本代表選手（短距離）

自己ベスト生年月日身長体重世界陸上代表回数

江里口 匡史 早稲田大10.07 88/12/17 170 60 初

木村 慎太郎 早稲田大10.21 87/6/30 171 68 初

塚原 直貴 富士通10.09 85/5/10 180 77 2大会連続2回目

高平 慎士 富士通20.22 84/7/18 180 60 3大会連続3回目

齋藤 仁志 波大20.42 86/10/9 180 70 初

藤光 謙司 福井セーレン20.46 86/5/1 182 69 初

筆 のもと（写真はテレビ放送より）